

## 第 4 回 日本人と「間」の切っても切れない関係

### 1 五月病とそれを許す日本人の社会

「五月病」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。四月に新たな生活が始まって希望に満ち溢れ、がんばってスタートするのですが、五月、それも終わり頃になると、徐々に自分の頑張りが空回りに見えてきてしまい、そしてなんとなく無気力になってしまう状態のことを「五月病」と言います。特に、徐々に春から夏になって、けだるい気候が日本を覆い尽くしますし、なんとなく仕事に慣れてきて、失敗も多くなります。日本全体の現象として「五月病」という単語を使うのは、よくできた言葉ではないでしょうか。今では「鬱病」という言葉をすぐに使ってしまうますが、わざわざ本物の病名ではなく、自分たちの周囲に身近にある日常の単語に「病」「患」という言葉をつけて、少し異常な状態を表している。これが日本人の特有の文化ですね。

「彼は鬱病です」と言ってしまうと、その人がずっと病気であるかのような感じになってしまいますし、ある意味で社会生活の中のハンディキャップがあるかのように考えてしまう人もいます。しかし、「四月からもともとが張り切りすぎていたのですよ」という意味を含め「現在は五月病です」と言えば、単純に誰でも経験のある一過性の状態であるということがわかるのです。このほかにも「彼は恋煩いで仕事が手につかない」などといえ、おせっかいな日本人は、野次馬根性も含めて、「仕事に集中できるように」その恋煩いを何とか解決してあげるような人も出てきます。日本人は、このように社会的な現象や個人の内容も、多くの「仲間」で共有することによってひとつの社会を作ってきたのです。

逆に、このような社会であれば、本当に病気であっても、その病気であると言うような感覚を取り去って誰とでもコミュニケーションをとるようになります。そのようなコミュニケーションの中で、集団で大きな力を発揮してきたのが日本の社会なのです。日本は歴史上、さまざまな困難に見舞われますが、この社会の集合体が全て克服し、そして明るく楽しい日本を作り上げてきたのです。

五月だからと言って、いきなり五月病と言う不思議なところからはじめました。しかし、本来であれば五月病と関係のない社会的なベテランも、五月病を言い訳にしてなんとなく羽を伸ばしたくなる気候なのが皐月です。厳しい冬が去り、そして木々の若葉が茂ってくる時期であり、また梅雨の前で陽気も朗らかです。農業の世界ではちょうど田植えの時期で、社会全体が田楽踊りや田植え民謡を歌いながら、リズムに合わせて田植えを行います。厳しい冬から脱して、朗らかな気候の中になる。この朗らかな気候の中で「ゆとり」が生まれてくるのが、この季節の特徴です。そして、この「ゆと

り」こそ、日本人の本当の強さの源ではないでしょうか。

最近では「ゆとり教育」が批判されていますが、実際に、それは「ゆとり」と言う単語の使い方そのものが問題なのであって、「ゆとり」そのものを否定しているわけではありません。そう考えると、日本人の中にある「ゆとり」は、この季節となんらかの関係があるのかもしれない。

## 2 日本人の贅沢「ゆとり」

それでは、春になってくると出てくる「ゆとり」について考えて見ましょう。

「ゆとり」という言葉の語源は、さまざま言われていますが、その中のひとつは「ゆったり」が短縮されたものであるとされています。では、その「ゆったり」とは「寛（ゆた）」（「豊か」と同じ）に「たり」となっています。ではその「ゆたか」とはどのような意味でしょうか。

【寛（ゆた）けし・豊けし】

1. (空間的に)ゆったりとしている。広々としている。

《万葉集・四三六二》 「海原のゆたけき見つつ」

《訳》海原が広々としているのを見ながら。

2. (気持ち・態度などに)ゆとりがある。おおらかだ。

《万葉集・一六一五》 「ゆたけき君を思ふこのごろ」

《訳》おおらかなあなたを思うこのごろ。

3. (勢いなどが)盛大だ。

《源氏物語・若菜上》 「最勝王経・金剛般若(ハンニヤ)・寿命(ズミヤウ)経など、いとゆたけき御祈りなり」

《訳》最勝王経・金剛般若経・寿命経など、たいそう盛大な御祈禱である。

<古語辞典(学研)>

ようするに、「ゆったりと広々としている様子」または「おおらかな様子」をさす言葉として、「ゆったり」と言う言葉ができ、その言葉から派生して「ゆとり」と言う言葉が出てきます。

そういえば、どことなく春になると、特に何かが変わったと言うものではなくても、気候的にどことなく「ゆったり」としてしまうものです。

そのような時も、普段の狭い机や椅子ではなく、なんとなく空間的に広々としたところ、たとえば普段よりもゆったりとした広めのソファや開放的なオープンカフェ、お父さんたちは屋上ビヤホールが始まる時期ですし、あるいは、椅子なんか使わずに芝生の上に大の字に寝転がって過ごすというのは、なんとなく心にゆとりができる内容ではないでしょうか。また、この文章を読みながら、一足先にそのような「小さな贅沢」を楽しんで、そのことを思い出している方もいらっしゃるかもしれません。

この「ゆったり」に重要なものが「間」です。上記の古語辞典の中にも「空間」と言う言葉が使われていますが、「間」があることが非常に重要になるのです。ゆとりの中には「時間」「空間」「間

合い」とさまざまな「間」を使って心が豊かになるように工夫しています。ある意味において、日本人が最も大事にしているものが「間」なのかもしれません。

よく外国の人が日本人のコミュニケーションについて困惑していることがあります。これらは、この「間」の理解ができない部分が少なからずあるのではないのでしょうか。そして、この「間」を適宜に保つこと、それが最も贅沢な「ゆとり」になっているということのような感じがします。では、そのゆとりにつながる、そして日本人の中で最も複雑で理解が難しい「間」とはどのようなものなのでしょうか。

### 3 「ゆとり」の大切な要素「間」と日本人の精神

オリンピック、また最近ではサッカーのワールドカップなど、様々な世界的な競技の場面に日本人が出場します。その国の選手が優勝した時に、海外の応援席ではその喜びを全身で表すのに、男性同士で抱き合ったりして喜びを表現することがあります。誰かが声をかけるのではなく、自然と近くにいる人と抱き合って喜ぶ姿がテレビなどで映し出されることも少なくないのです。中には頬ずりをしたり、飛び上がったりして喜びを表現する人もいます。

しかし、日本人の場合は、そのようなことをする場面はほとんどありません。大阪の道頓堀に飛び込む人がいたのは数十年前に事件になりましたが、基本的には一人で喜びを表すことが普通になってきています。日本人の応援席で、よくうつされる映像は、選手の親御さんや親族などが、人知れず涙している場面などで、その映像が感動を呼ぶことが少なくありません。周囲の喜びの喧騒の中で、その家族だけが音が無くなったかのように涙して喜んでいる姿などは日本人の心に響くものがあります。

この喜びの表し方の違いこそ「間」の違いともいえるのではないのでしょうか。海外の人は、スキンシップを行うことで特別な時を過ごす、特別な感情を示すということがあります。まさに知らない人同士で抱き合って喜びを表現するというのは、そのようなことではないのでしょうか。これに対して、日本人は日本人のお互いの「間合い」というものを大切にする文化を持っているのではないのでしょうか。今までの苦労が実って喜びを表現するときに、その、間合いを取ってお互いの喜びを表現する、知らず知らずのうちにそのような文化をもっているのです。

日本人は、武士の文化が長く、台頭して生活をしていたことがあります。「武士道」の精神から「刀は侍の魂」というように言われ、その刀の鞘が当たっただけで「無礼」として相手を討つことができることとされていたのです。貴族の世界でも、実際に近くによってじろじろ見ないというものがあります。今でも神社などでは、おい参りする場所と神様が実際にいらっしゃるお社とはかなり距離があるのです。位階級とその距離感というのは、その間合いによって大きく違うものになっていました。武士の世の中では、鞘が当たらない程度の距離、間合いが最も良いとされていたのではないのでしょうか。

また、女性も同じ文化性を持っています。平安貴族の女性は、御簾で隠した座敷の中でさらに扇で顔を隠すということがあるのです。有名な「源氏物語」の中の「朝顔」の巻に、「をかしげなる姿、

頭つきども、月に映えて、大きやかに馴れたるが、さまざまの相乱れ着、帯しどけなき宿直姿、なまめいたるに、こよなうあまれる髪の末、白きにはましてもてはやしたる、いとけざやかなり。小さきは、童げてよろこび走るに、扇なども落して、うちとけ顔をかしげなり。」というような書き方がある。光源氏が雪の降った夜に御簾を上げさせてみたところ、女の子たちが庭で雪山を作って遊んでいる様を描いた部分である。まさに、女童が、雪の美しさと雪遊びの楽しさに、周りからみられることを恐れずに「扇なども落として」遊んでいる様を描いている。このような表現があるのは、まさに、扇で顔を隠すことの重要性がこの時代の根底にあり、その下においてそのような重要なことも忘れてしまうほど面白いということと、それを忘れて遊べるほど女童が幼く可愛いということを表現したものである。現在ではそのまま通じない程度表現なのかもしれません。

このほかにも、伊勢物語の中には、牛車が揺れて御簾が落ち、一般の人に顔を見られてしまった女性が、そのまま寺に入って出家し、尼になってしまったというような話も読むことができます。

このように貴族の時代から、日本人は女性に対しては一定の距離だけでなく、その姿を見るということも、ある意味でタブー視されていたものであり、その感覚が、昭和の中期まで日本人女性の貞操感覚として根付いていたものなのです。

このように、日本人の場合はその歴史的な部分から、日本人独自の距離感、要するに「間合い」を保って付き合うということが最も重要とされていたのです。その「間合い」以上に近づけば精神的な緊張感が生じるし、相手の「間合い」を尊重して不用意に近づかないことが社会的に重要なエチケットにもなってきたわけです。そして、そういう目に見えない空間を重視する文化が続いたからこそ、“以心伝心”というような独特の意思交流もありえたのでしょう。

#### 4 女性と間合いを示す神話につながる理由

このように説明しても、いまひとつはっきりしないのかもしれませんが、日本の武士が鞆が当たらない距離を「間合い」として重要視するのは、身を護るためとして理解できるかもしれません。しかし、それ以外の部分、特に女性が顔を見られただけで出家してしまうと言うことは、現代ではなかなか理解できないかもしれません。イスラム教では、女性は肌をさらしてはいけないと言う戒律がありますが、それも、厳格な場所でなければ適用されないことがあります。現代、特に男女同権と言われる現代では、女性が顔を見られて出家すると言う事の理由をもう少しご紹介したいと思います。

日本の神話では、日本はイザナギノミコトとイザナミノミコトによって作られ、その後この二人によって「神生み」の伝説があります。イザナギとイザナミの間には日本を形作る多数の神々が生まれるのですが、そのときにイザナミが、火の神であるカグツチ（迦具土神）を産んだために陰部に火傷を負って亡くなってしまいます。イザナギは、イザナミに逢いたい気持ちを捨てきれず、黄泉国まで逢いに行きますが、腐敗して蛆にたかられ、八雷神（やくさのいかづちがみ）に囲まれたイザナミの姿に恐れをなし逃げてきてしまいます。その後、イザナギが黄泉国の穢れを落とすと様々な神が生まれ、最後にアマテラス・ツクヨミ・スサノオの三貴子が生まれるのです。

このような古事記の記述でわかるように、日本の神々は実が身から生まれてきています。そして、その神々も死んでしまうと黄泉国に行くのです。黄泉の国に行ったイザナギノミコトも、穢れを落とします。要するに、神様でも黄泉国は穢れているという感覚を持ちます。しかし、ここにあるように黄泉国は、この世と隔絶されている場所で、なおかつ、神々も生み、また神々も死後そこに行く場所なのです。

さて、イザナミノミコトとおなじように、古来、人間の女性もその体の中に「黄泉国」につながる道があると信じられていました。日本では、何も無いところから何かを生むのは、必ず黄泉国とつながっていると信じられていて、ある意味で恐れながら、ある意味で崇敬していたのです。卑弥呼をはじめとして、日本の神社には巫女がいます。この巫女がなぜ「女性」なのかというのは、女性には、物事を生み出す力があるとされているからですし、「処女」でなければならないのは、神社の神聖な場所に黄泉国の穢れが入り込まないようにするためとされています。

一方で、日本には森羅万象に神々がいるとしています。「言霊」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。人間の話す言葉にも魂が存在して、一度発した言葉は魂を持って、生きてこの世の森羅万象に影響するとした考え方です。消えてしまう「言葉」にも魂が宿るのが日本です。では、当然に「視線」にも魂が宿り、そして力を与えます。そして「見る」事は「知る」事に通じます。それは現在でも同じなのかもしれません。女性は肌を見られることが、そのままその内面まで知られてしまうこととして考えられており、そして、その内面とは女性の胎内にある「黄泉国」を見られてしまったということになるのではないのでしょうか。

そして、女性はそのことを見られてしまうと、その力を失ってしまうと言うように信じられていました。男性に見られるということは、黄泉国にいたイザナミノミコトのように醜い姿をさらし、イザナギノミコトのように世の男性から穢れとして認識されてしまうために、黄泉国とつながっている道を閉ざされてしまうと考えられていたのです。

このことから、日本では高貴な人、これはアマテラスオオミカミの子孫である天皇やその血筋にあたる人、そして、胎内に黄泉国を持った女性との間、つまり「黄泉国」に近い人々との間には、必ず「秘密」がありそしてその秘密を知られないように「間」を保って、また直接見ないのが礼儀とされたのです。

ちなみに、昔は私室のことを「局（つぼね）」と言っていました。部屋の場所をさして大奥などでは人をさす言葉になり、春日の局などは人名として有名ですね。一方、公式の場所は「間」という単語を使いました。「謁見の間」などは「間」という同じ単語を使って「部屋」の意味になります。この区別は、まさに高貴な人との距離になります。局は、私室ですので、距離を保つ必要はありませんが、間はあくまでも公式な場所などを指しますので、高貴な人と遭うときは「間」が必要になります。ですから、公式に使う場所を「謁見の局」とは言いませんね。「局」は密談などをするくらいの距離感になってしまうのです。このように、同じ部屋をさす言葉でも、「局」と「間」と言うように使い分けられているほど、日本人には「間合い」が重要と言うことになるのです。

## 5 「間」を保つために使われた日本人の知恵

日本人にとって「間」が必要と言うことは、よくわかるのではないのでしょうか。逆に、日本人は「間」をうまく使った芸能に心を奪われます。たとえば、歌舞伎の「にらみ」です。歌舞伎のにらみとは市川団十郎にだけ伝わる秘儀です。実際に「技」としては少し寄り目にして前をにらみ静止するだけで、誰にでもまねができます。しかし、歌舞伎と言う演劇の中において、お囃子やそのほかの演技者と合わせた上で、グッとにらみを効かせて静止すると言うのは、他の共演者だけでなく、会場の観客も一体になって「間」を共有しないとできないことなのです。技そのものがそんなに難しくなく、子供もマネをしてしまうものなのかもしれませんが、しかし、その技にいたる会場の一体感や「間」が最も重要であり、なおかつその「間」を作る技術は超一流の歌舞伎役者にしかできないのです。

このほかにも「行間を読む」などという言葉も、日本語の中にはあります。実際には何も書いていないことなのですが、書いてあることや話したこと、要するに表面にあらあれていることから、本当に言いたいことの内心を読み取って理解すると言う意味で使われます。相手との適切な間合いを保つために、本当に言いたいことを言わずに、少々遠まわしで言いたいことを包み隠すなどという文化が出来上がるのです。

時間でも「間」があります。急いでいて何とかがんばれば、次の「間合い」に「間に合う」のですが、その間合いをはずしてしまうと「間抜け」になってしまうのです。そして、時間や空間など全てにおいて、タイミングをはずしてしまうと「間が悪い」と言うことになります。他は何も悪くないし、タイミングよく行えば賞賛されることでも、タイミングがずれてしまうとまったく同じ事をして「間が悪い」という表現をするようになるのです。

このように、人と人の間、時と時の間、雰囲気と雰囲気の間などひとつの事を行うのにも「間」を計って物事を行うのが日本人です。これは建築にもっとも良く現れているのではないのでしょうか。日本の建築は、壁などにあまり多く飾り物をせず「素材」そのものの味を生かし空間を造ることが最も良いとされています。素材そのものを生かし、狭い部屋をより広く見せて「間」を持たせる技術が日本にはあります。「借景」と言うもので、ふすまなどを薄く開いて外の景色と一体化させ、まさに部屋の中に外の風景の芸術品があるかのように見せる技術です。昔の建築は「借景」を行うために山の中などに家を立て、そのことを計算してふすまなどを設けています。現在も京都の清水寺や桂離宮などにそのような造りの建築を見ることができます。人と人だけでなく、日本人はこのようにして自然と人、空間と空間の間もうまく「間」を保って文化を育んできたのです。

## 6 国際感覚と日本的な文化の融合

このような「間」を重要にする感覚は、スキンシップを大事にする欧米の価値観とは適合せず、しばしば「日本は理解しにくい国」という批判を受ける場合があります。海外に行ってホテルのロビーなどに所狭しと、絵画や芸術品が飾られている光景にいと、どうしても日本人としては「ごちゃご

ちゃしている」という感覚になってしまうものであるし、スキンシップをしようとする外国人をみると、より一層警戒心が強くなってしまう日本人も少なくないのではないのでしょうか。

日本人は、どうしても「間」を取ってしまいます。日本的で好ましく、良いほうに解釈される場合も少なくありません。特に日本女性の慎ましやかな態度は、外国人男性から非常に好感を持って見られています。一方、同じ特性であっても、「わかりにくい」というような感覚になることも少なくありません。日本人と日本人の間でも、場合によっては家族の中でも「間」を取ってしまう民族性の日本人。当然に、顔かたちも習慣も言語も違う外国人との間においては、より大きな「間」を取ってしまい、表面上親しげにしているけれども決して心を許さない、本音の見えづらさという評価もあるのです。

では、日本人はどのようにしたら良いのでしょうか。最近「グローバル化」などといって日本人が外国人化するような試みが多く見られます。会社の中の言語を、英語を公用語にしてみたり、労働環境を外国と同一にしてみたりすると言うものです。しかし、逆に外国人の観光客は、国によっては増加しています。一時東日本大震災や原子力発電所の事故の影響で観光客が減ったり、あるいは政治的な理由で来日者数が減った国もありますが、それでも、欧米各国からの観光客は非常に日本に満足して帰ります。また、企業でもそうで、たとえば、製造業でも日本の労働大計や雇用関係は海外でも非常に高く評価されていますし、小売業などでは日本の単品管理システムが世界で最も進んでいると評価され、多くの外国の小売業関係者が見学しに来日します。特に小売業では、まさに「お客様のニーズに合わせた品揃えを行う」日本の管理システムは、まさに、日本の「間」を商売に活用した例として、世界の小売業の集まりで何回か紹介されているのです。

本来、日本人の国際化は「相手と同化」することではなく、「相手との間合いを取りながら、自分の良いところを生かす」と言うのが日本人の本来の強みであり、日本人の文化や精神に適合しているのではないのでしょうか。「グローバル化の波」に対しても、少し「間」をおいて、それでいても「間に合う」ように日本的なところを海外の良いところと融合させてゆく、そのような「ゆとり」を持って対処していただきたいものです。

五月、皐月の時、少し心に「ゆとり」があるので、間を縫って日本と世界のことを考えていてはいかがでしょうか。

振学出版研究員 宇田川敬介